

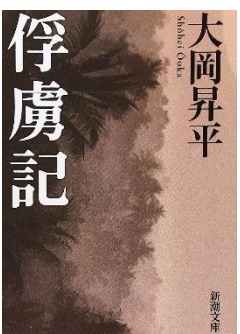
「論理」が生まれる場【参考資料】

読書案内

●「捉まるまで」（大岡昇平）

『俘虜記』のなかの一篇。戦争末期、兵士としてフィリピンの最前線にいた著者は病に冒されながら、たったひとりジャングルのなかをさまよった。こちらに気づかないまま、すぐそばを敵の若いアメリカ兵が通り過ぎた。銃を構えた著者は撃つことができたが、撃たなかった。なぜ撃たなかったのか。

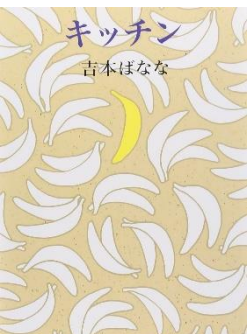
安易に結論を急がず、自分の経験をめぐって細かい分析と徹底的な思索が展開される。その思考の強度に私たちは圧倒される。



●『キッチン』（よしもとばなな）

唯一の肉親であった祖母が他界し、その死を乗り越えられずにいた「みかげ」は、祖母が懇意にしていたという花屋の青年「雄一」の家に寄宿することになる。雄一は、母であり父である「えり子」と暮らしている。新しい生活の中で、みかげは、どのようにして境界を乗り越えていくのか。

新しい経験、今まで感じたことのない思い。新しい出会いに踏み出す瞬間、人はいったいどのような境界線上にいるのか、考えてみよう。



●『父と暮らせば』（井上ひさし）

原爆投下後の広島を舞台にした二人芝居。人生の岐路に立つ娘と、原爆で亡くなった父の幻とが織りなすユニークな会話、二人の経験した辛い過去をあぶり出す。

セリフの端々から、登場人物の過去の行動や現在の選択の理由を分析してみよう。

